



VOL.28 NO.2
(通巻84号)
2002
ART NEWS
千葉県立美術館



収蔵作品による企画展

「眼差しの行方—人物表現—」

平成14年2月2日～3月24日

本館収蔵の日本画、洋画、版画作品の中から、人物表現における「眼差し」に着目して作品を紹介します。表された人物の眼差しはすなわち作家の眼差しであり、眼の形や動きや表情にその心が凝縮されているように思います。作家は何を思い、何をみようとしたのでしょうか。ここでは、椿貞雄の眼差しについて考えます。

椿貞雄の眼差し

大正4年「自画像」の時

大正3年(1914)9月に18歳の椿貞雄は故郷、山形県米沢から上京し、10月にたまたま岸田劉生の個展を見たことで、その後の人生は決まりました。

その個展には巷間でよく知られている茶褐色の重厚なタッチの自画像十数点が展示されていました。当時それは、ふんぞり返って人を睨み付ける不遜な絵とか、描法や色調が時代錯誤だとかいわれ、必ずしも評判はよくありませんでした。しかし、椿はその自画像に強烈な衝撃をうけ、圧倒されたのです。

上京して寄宿したのは代々木山谷の叔母の家でした。劉生の風景画の中でも名高い「切り通しの写生」(1915年作)は代々木山谷の風景であり、劉生もそこに住んでいました。偶然はつづきます。散歩していた椿は、たまたま岸田劉生の門標のかかる家を見つけます。劉生に会いたい、会って話を聞きたいという気持ちを押さえることができず、12月、思いきって手紙を書くと、ほどなく「何時でもおいで下さい」との好意的な返信をもらったのです。

ところで、それ以前の椿は美術とどんなかわりがあったのでしょうか。最新の美術の動向を伝える「白樺」などを講読していた兄(医学の道半ばにして夭折した)に感化されて絵に興味をもったといわれています。故郷米沢中学の学生だった椿は、大正元年から3回、水彩画のグループ展を開催しています。グループ展といっても、ひとり30点程を出品するたいへん意欲的な展覧会でした。椿は絵にのめり込んでいたのです。無断欠席などによって留年となり、中途退学を余儀なくされたようです。ある時、画家になりたいといった椿に、「腕を切ってやる」と、日本刀を持ち出した父親に勉強をつづけるという条件付きで上京を許されてい

たのでした。

閑話休題。劉生から返信をもらった椿は思い立ちます。購入して間もない油絵の具で、明るく正月2日から9日にかけて12号Pのキャンバスに「自画像」を一気に描き上げました。劉生の自画像に触発されたに違いありません。それを携えて劉生宅を訪ねます。

「個展をみた僕は矢も楯もたまらなくなり、翌年正月14日、東京には珍しく大雪の日、自画像と風景を持って恐る恐る彼の家を訪ねた。唇をぴくぴくさせ、たえまない貧乏ゆすり。ヒザッコをなで廻すので油でピカピカにひかり、穴があいていて、それに指を突っ込んではいじく、画面に顔をすりつけて見る。どうなることかと思ったが・・・」



近眼の劉生が食入ってみた作品がこの本館収蔵の「自画像」です。

高鳴る気持と自分の絵をどのように評価してくれるのかというある種の不安を併せ持ちながら、この「自画像」の眼差しには、すでに青雲の志というべき、画家の道へ進む強い決意がみてとれます。

かくして劉生の反応はどうだったのでしょうか?

「・・・自画像をほめてくれたのは意外であり、天にも昇る気持であった。(中略)一番最初に彼にめぐり合うことが出来たということは、僕にとって何という仕合わせなことであつたろう。」

この時、椿18歳、劉生23歳。

大正7年「八重子像」の時

この出会いから昭和4年に劉生が亡くなるまでの15年間のほとんどを、岸田劉生という強烈な個性とともに歩むことになります。

椿と劉生のその後を、おおまかにみてみましょう。

・大正4年(1915)3月

劉生のすすめで巽画会に出品。「自画像」はその時の最高賞2等賞となる。これを機に正則中学を中退、画業に専念する(叔母に父親を説得してもらう)10月、第1回草土社展に岸田劉生の他、中川一政、横堀角次郎、木村莊八らとともに出品。

- ・大正6年2月、劉生療養のため神奈川県鶴沼に転居。
- ・大正9年2月、鶴沼に転居。
- ・大正10年3月、劉生夫妻の媒酌で結婚。
- ・大正11年1月、春陽会設立に際し劉生らとともに客員として入会。
- ・大正12年12月、大阪毎日新聞社主催の「日本美術展覧会」で一等賞受賞。審査員に劉生がいた。
- ・大正15年4月、千葉県船橋尋常高等小学校（現船橋市立船橋小学校）の図画教員となる。
- ・昭和2年6月、千葉県船橋に転居。
- ・昭和3年4月、慶応義塾幼稚舎図画教員となる。
- 9月、船橋尋常高等小学校退職。
- ・昭和4年7月、劉生、船橋の椿宅を訪ね5泊する。
- 12月20日、劉生、満州旅行の帰途、山口県徳山で死去。38歳。

劉生の大正9年の「鶴沼日記」には「椿の今度の妹の肖像は感心する。一寸シゲキ受ける」「椿の肖像画は随分よくなっている。今外にこれ位人の顔のかけるものはない」としばしば記されています。椿がめきめきと力をつけ、劉生の主宰する草土社や春陽会等でなくてはならない存在となっていました。しかし、そんな椿には、常に「劉生の模倣者」という非難が浴びせられていました。

大正7年、米沢に帰省した時の作「八重子像（酸漿を持てる少女の肖像）」をみてみましょう。



自信に満ちて描き切ったかにみえるこの力作の裏面には、次のような書き込みがあります。

「千九百十八年八月月末に故郷米澤の生家に於て妹八重子を描きしものなりまる一ヶ月を要す色の点で自分の思い出の作なり当時自分は絶望しており画筆をなげうつか画家として立つかのわかれ道の坂上にいたり（後略）」

偉大な師をもった椿は自己の道を切り開くための苦難の道を歩んでいたのです。

「模倣のないところに真の伝統はない」という劉生には、椿が画家としてしごく当然の道を歩んでいると思えたでしょう。「君の仕事に自信をなくす必要は決

してないと思ひます」と手紙で励まし、「独創々と独創を唯一のものの様に言うが、独創は美への手段に過ぎない。又本当の独創というものは、他の伝統から切りはなして、ピョッコリと単独に現れるものではない」「椿こそ本物だ」と雑誌で擁護しています。共に画架を並べ、刺激しあいながら制作していた劉生と椿は、師弟というより志を同じくする友であり、椿に向けられる非難は、劉生には自分に向けられたのも同じでした。

椿の眼差し

大正4年の「自画像」で劉生に向けた熱い眼差しは、劉生亡き後、どこに向けられたのでしょうか。

昭和7年5月、「劉生の模倣者」という非難を払拭し、新たな歩みを始めるべくヨーロッパに旅立った椿は妻に宛てて「岸田さんには色いろの事を教わった。終生の恩人だが、いよいよ古衣をかなぐりすてる時が来た気がする。これから二、三本当に自分のものが生まれると言う気が強くしている。帰って仕事をするのが待ち遠しい。」と記しています。昭和25年には、「やっと劉生を意識することなく自由に絵が描けるようになった」と語った椿は、確かに房州や長崎などに取材した風景で独自の展開をみせていきますが、仕事の大半は劉生の軌から逃れることはできませんでした。

静物画の仕事では、劉生が好んで取りあげた「冬瓜」を、師を偲ぶかのように繰り返し描いています。

人物画においても「麗子像」が念頭にあったのでしょうか、自分の子や孫を多数描いています。しかし劉生が「麗子」に向けた眼差しと椿のそれとは明らかに違います。劉生は「麗子」に林檎や草や石と同じような造形的な対象として厳しい眼差しを向けています。「麗子像」の眼差しは顔を擦りつけるかのようにキャンバスに向き合い、未だみえぬものをみようとする憑かれた劉生の眼差しそのものです。対して、椿が子や孫に向ける眼差しはこの上なく優しい。慈愛に満ちたその眼差しには、師を敬慕し、家族の面倒をよくみ、愛した椿、友や後輩そして郷里を大切にしたい椿の人柄がよくでています。「劉生の模倣者」とは表面的なことであって、あの「自画像」以来、椿が生み出すものにはいつも優しい眼差しがそそがれていました。以前、船橋小学校で椿が指導と伝えられる図画作品を見ましたが、現在では眼にすることが難しいくらい人間味に溢れた佳品だったことを思い出します。

昭和32年12月29日死去、享年61歳でした。

収蔵作品による企画展「眼差しの行方」では「自画像」など5点を展示します。椿や劉生に思いを巡らせていただければ幸いです。

（上席研究員 濱松繁雄）

参考文献

「画道精進」椿貞雄著 光風社書店

「岸田劉生—椿貞雄の回想から—」東珠樹著 雪華社

〈その他の本館収蔵作品による企画展〉

「抽象彫刻の試み」平成13年12月15日～平成14年4月14日

「石井雙石の篆刻」平成14年2月2日～3月24日

「金工作品の魅力」平成14年2月2日～4月14日

*前号「企画展 石井康治展」の中で掲載した写真2点(作家制作風景、彩烈文器)は写真家の大堀一彦氏からお借りしました。改めて御紹介致します。

が なる つ くる

こどもワークショップ

【素敵に！美的に！アート体験】

近年、こどもを対象にした美術館事業の開発に重点を置いて、昨年度から新たに「つくる」行為を全面に押し出した既成概念にとらわれない様々な造形体験プログラムの開発に力を入れています。その核となるものが『こどもワークショップ』で、平成13年度は3回開催しました。

美術館の外壁に約200mのロール紙をはりつけ、自由にウォールペイントした企画には、100名以上のこども達が参加し、エキサイティングな一日となりました。

夏休みの定番となった企画『発光スチロール・オブジェ』には応募が殺到し、実施日を1日増やす結果となり、主催者としてはうれしい悲鳴が上がりました。

新しい年を迎えるのにふさわしい自分なりの“アートかどまつ”を制作する企画では、親子で協力しながら、バリエーション豊かな作品が出来上がり、心あたたまるものが…。

「絵が特別上手なわけではありませんが、大きなキャンバスに伸び伸びと描く事ができたら、そんな経験をさせてあげたいと応募しました。」…こんな文章が応募はがきに書かれていました。“自由”で“伸び伸び”できる楽しい企画をこれからも実施したいと考えています。2002年は、美術館で！



一日学芸員体験学習

「…自分に責任というものが伴うことが分かり…」

本年度は、6月(1中学校2回、計18人)、11月(4中学校6回、計46人)の規模で中学1、2年生を対象に行いました。

内容は、午前は美術館の役割や学芸員の仕事を理解するためのガイダンス、館内施設見学、そして実技Ⅰとして屋外彫刻の鑑賞をし、それをまとめて発表会を行いました。午後からは、実技Ⅱとして、美術工芸品の壺、掛軸の取扱いを和室で行いました。生徒たちは

概して美術に関心があるということで取り組みもよく、様々な役割を担った人たちが美術館を支えていること。学芸員の仕事がどのようなものであるかを学習したり、目の当たりに見たり体験しながら理解を深めていったようです。

特に美術工芸品の取扱いは、普段経験しないことへの緊張感と正座で行うということも相俟って、かなり神経を使ったようです。

体験した生徒たちの感想を、いくつか紹介します。

「僕が心に残った仕事は、裏で支えている機械関係の仕事です。温度や湿度を一定に保つため24時間ずっと働いているのに感動しました。僕も学校やクラスでそういうふうを支える存在になりたいです。」

中学2年生(男子)

「おかげさまで美術館の仕組みや美術品の取扱い方など、学校では教えてくれないようなことを学ぶことができ、今までより美術館が身近に感じられるようになりました。数多く体験した中でも一番心に残っているのは、掛軸や壺の取り扱い方について学んだことです。掛軸や壺は見たことがあるくらいで触れることはもちろん、自分の手で飾ることなど一度もありませんでした。あの掛軸を矢筈を使い持ち上げた瞬間の緊張感や、壺を箱から出した時の達成感は今でも忘れられません。」

また美術品を取り扱うということは、同時に自分に責任というものに伴うことが分かり、そういう点でも大変よい勉強になりました。」

中学2年生(男子)

「ミレーの絵や、コロー、ルソーなど有名な絵ばかりあって、もうビックリでした。でもまたみたいってずっと、今も思っています！私はすごく、感動っていうことを学びました。絵や彫刻をみて、こんなにいい気持ちで、こんなに感動するなんて、もうすごく、今きもちがいいです！今後、心の勉強として美術館に行きたいです！」

中学2年生(女子)

「私は県立美術館の仕事といえば、絵を飾ったり、貴重な作品を保管するぐらいにしか思っていませんでした。しかしその考えはあさはかで、実際にお仕事の説明等を受け、大変驚きました。美術館はけっして絵を飾るだけではなく、いかにその絵をこれから先の未来まで持たせるのかを工夫して、仕事に誇りを持って働いていらっしゃる姿が、私の印象に深く刻みこまれました。また、普段はけっしてできないような美術品の取扱いの体験をさせていただき、その節はいろいろとご迷惑をおかけしました。一つの作品を飾るのにも手順があって、その手順はその作品の為を思っていることなど、みなさまが本当に作品に対する思いやりが強いことをあらためて感じました。」

中学2年生(女子)

来年度、新学習指導要領が施行されます。その根幹である「生きる力」を育むために、さらに創意工夫をもとに館学連携してこの事業を推進したいと思います。

学校巡回展

「出前講座 美術館がやってきた」と題して、香取・海匠地区の7校(小学校4校、中学校3校)で開催し、希望のあった学校へは、美術館職員が出向き、ギャラリートークを実施しました。

児童・生徒の感想

・今回、ギャラリートークに参加し、あらためて「芸術とは素晴らしいものだ。」と感じました。その時代にその時代の画家によって描かれた作品が解説と絡まり、「美」を「心」で感じられたと思います。

中でも「聖ヨハネの説教」が一番心に残っています。絵の中にある「自分が気付いた世界」と「人に気付かされた世界」。その二つが交わって色彩、構図、人物空間の全てが生きて私に語りかけてくれたような気になりました。それはまるでヨハネが現代によみがえったようで、人々は一人一人が意志を持って話を聞いている。

ギャラリートークは私にとって大変な勉強になり、その時感じた美は心に留まり続けることでしょう。私は「芸術」とは人々が共通して持ち合わせる心だと思います。また、このような素晴らしい感覚が、いつの時代にもあり続けられたいと思います。

ギャラリートークという、素晴らしい機会を設けて下さってありがとうございました。(中学3年 女子)

・ぼくの楽しかったのは「知る絵々とクイズ」です。たいへんだったけど、おもしろかったです。とちゅうにひっかけ問題もありました。また、ぼくたちの学校にきてください。

(小学低学年 男子)

・私はギャラリートークに参加して、絵というものはきっと絵をえがいた人の気持ちや大変さがあらわれるものなんだと思いました。

それに、私はギャラリートークで見つけたことがあります。それは、絵は人の心を「ドキドキ」させたり「感動させたり」「なごませたり」いろいろな気持ちにできるものなんだと思いました。

私たちの学校にたくさんの絵がやってきてくれて本当によかったと思います。(小学高学年 女子)

先生方の感想

・ただ展示するだけよりも、説明を聞き、ある程度の知識を持って鑑賞することはとても有意義でした

・生徒も「なるほど」と感心していました。

・美術館というと、とかく足が遠のいてしまいがちですが、巡回展とあわせてのギャラリートークは大変よい企画で感謝しています。

・美術館に行ったことの無い子どもがほとんどですので、今回のような企画があると休みの日を利用して美術館に行ってみようとする子が増えると思います。小さいうちによいものを見せることはとても大切だと感じました。

・文化祭や学校行事と展示期間が重なり、来校者や保護者の方々も熱心に見ていました。保護者の中には毎年展示して欲しいとの声もありました。

その他にも学校・学年・学級通信やPTA新聞、地域の広報誌などに展示案内やギャラリートークの様子などがたくさん報告されました。

中学生がまねた「解剖学講座」

似てるかな？



レンブラントの「解剖学講座」

(いきいき広報「くりもと」〔栗源町広報紙〕から)

来年度は、今年度の開催校からの貴重な意見、美術館側の反省を生かし、更に充実した「美術館がやってきた」を企画していきたいと思います。

千葉県立美術館友の会のご案内

友の会は、千葉県立美術館の活動に協力し、楽しい雰囲気の中で、美術文化の向上をはかり、会員相互の親睦を深めることを目的としています。

◆年会費 2,000円

◆会員になりますと

1. 会員証の発行
2. 事業案内・実技講座等のご案内
3. 本館企画の有料特別展のご優待
4. 友の会だより「しおさい」の配布
5. 友の会事業のご参加(秋の美術鑑賞の旅・葉美会展・各種実技講座)等が受けられます。

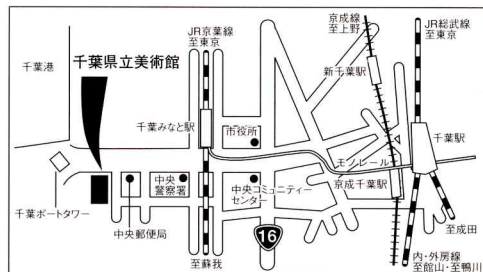
千葉県立美術館 友の会ミュージアムショップ

☎043 (242) 8311 (代) にお問い合わせください。

<美術館案内>

●JR「千葉」・京成電鉄「京成千葉」駅より「千葉ポートタワー行」バス15分「美術館・中央郵便局前」下車徒歩1分

●JR(京葉線)・千葉都市モノレール「千葉みなと」駅下車徒歩8分



〒260-0024 千葉市中央区中央港1-10-1

☎043 (242) 8311 (代)

